

# I 鳥取県の畜産の現状

日本の畜産業は昭和30年代以降、人口の増加、所得の向上等による需要増加に支えられ、順調に発展し、本県でも畜産農家数及び家畜飼養頭羽数は急激に増加した。しかし、昭和50年代に生乳・豚肉・鶏卵・鶏肉の供給量が需要量を上回ると、次第に計画生産体制へと移行することとなった。

本県の家畜飼養頭羽数は酪農では昭和40年代、肉用牛では昭和30年代、養豚・養鶏では昭和60年代をピークに減少している。また、畜産農家数については、各畜種とも小規模層を中心に減少しているものの、飼養規模の拡大や畜産企業の増加に伴い、一戸当たりの飼養頭羽数は増加している。

近年の国内の生産基盤強化の動きもあり、鳥取県でも肉用牛や乳用牛の飼養頭数は増加していることから、鳥取県の令和元年の農業産出額761億円のうち畜産に係る産出額は286億円と増加し、全体に占める割合は約38%となっている。

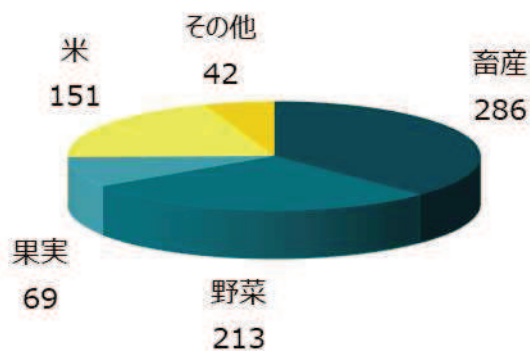
【鳥取県の農業産出額の推移】

(単位:百万円)

区 分	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	
農業産出額	65,300	69,700	76,400	76,500	74,300	76,100	
うち畜産産出額	24,600	26,500	27,000	27,500	27,700	28,600	
内 訳	肉用牛	2,600	3,400	4,400	4,800	5,100	5,400
	乳用牛	6,600	6,900	7,200	7,100	7,800	7,900
	豚	5,400	5,400	5,200	5,400	4,700	4,500
	鶏	10,000	10,700	10,200	10,200	10,100	10,600
	その他	0	0	0	0	0	0

○農業産出額の内訳 (令和元年)

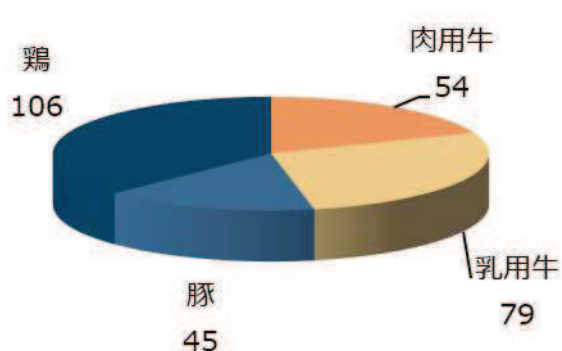
(単位:億円)



総生産額 761億円

○畜産産出額の内訳 (令和元年)

(単位:億円)



総生産額 286億円

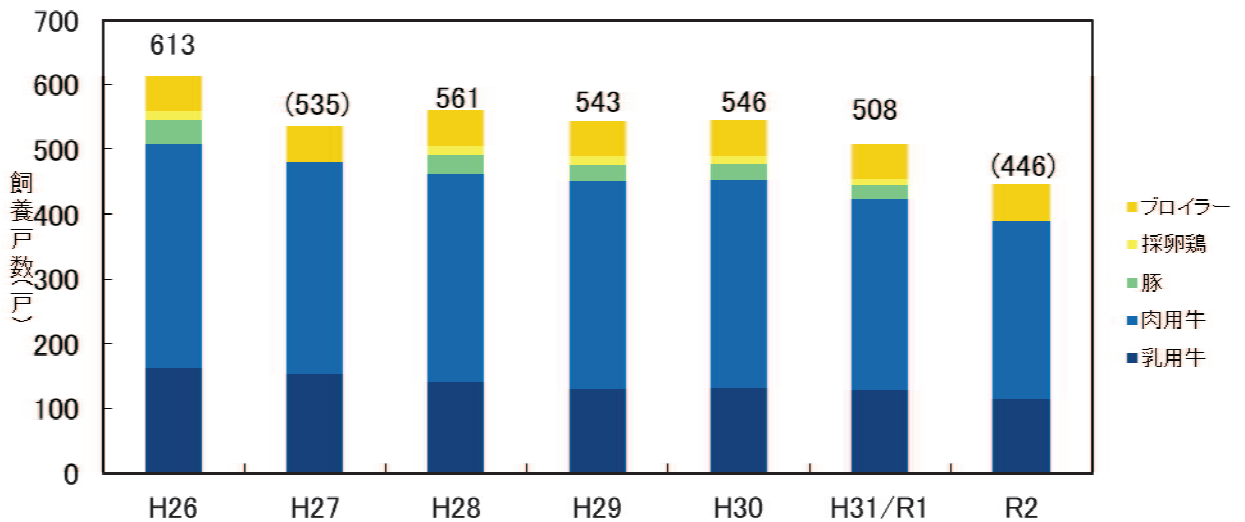
※統計数値については、集計時に四捨五入等の処理により、合計と内訳の計が一致しないことがあります。

資料：農林水産省統計部「生産農業所得統計」

【畜産農家戸数の推移】

(戸)

区分	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	R2
乳用牛	162	153	140	131	132	128	115
肉用牛	346	328	323	319	320	295	274
豚	37	—	29	26	26	21	—
採卵鶏	14	—	14	14	12	11	—
ブロイラー	54	54	55	53	56	53	57
合計	613	(535)	561	543	546	508	(446)



注：H27・R2は『農林業センサス』実施年のため豚及び採卵鶏調査はなし。

\*ブロイラーについては、平成23年以降は県畜産課調べの数値。

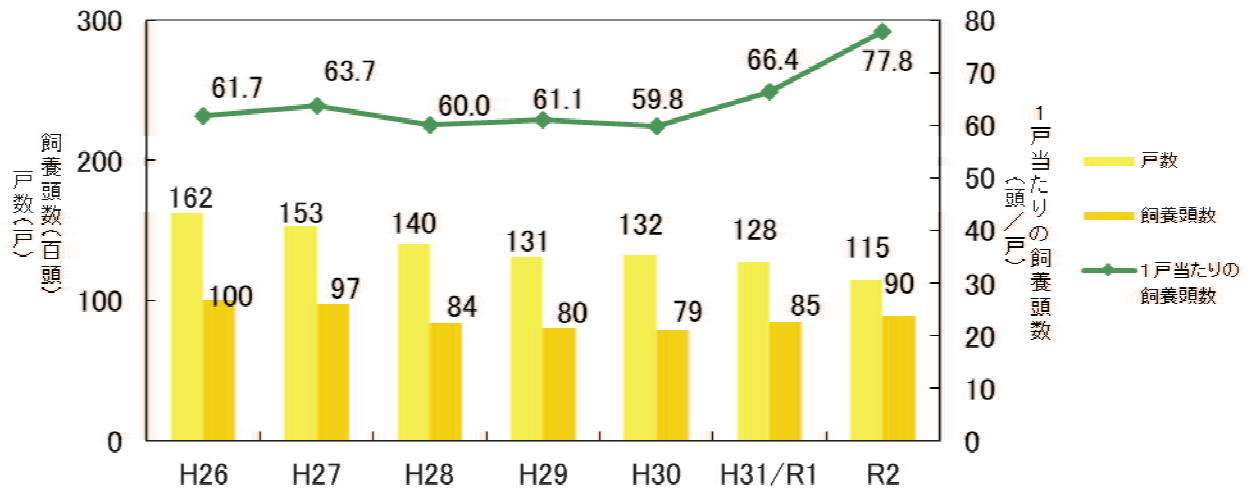
資料：農林水産省統計部「畜産統計調査」

酪農

- ・総飼養頭数は、小規模農家の廃業により平成8年以降緩やかに減少を続け、平成13年から平成18年までは一時増加に転じたものの、その後減少が進んだ。ただ近年は大規模農場の整備など規模拡大の動きもあり、平成31（令和元）年以降は増加傾向にある。
- ・1戸当たり飼養頭数は平成27年までは規模拡大が進み、増加傾向にあった。平成28年には減少に転じていたが平成31年以降は増加傾向にある。酪農においては専門化による大規模経営が増加するとともに、比較的后継者が確保され、地域農業の中核的リーダーとなっている。
- ・生乳生産量は、近年は5.6万トン程度で推移していたが、飼養頭数の増加に伴い令和2年には6万トンを超えた。
- ・平成15年4月から、県産生乳は全量が県内で牛乳や乳製品に加工され、県内外に出荷されている。また、県内乳業再編等により、酪農専門農協1農協・1工場体制（市乳）となった。
- ・飼料作物の栽培は、近年、輸入飼料価格の高止まりにより、イタリアンライグラス中心の農家が飼料用トウモロコシに転換する一方で、飼料用稲・飼料用米の栽培が増加していたが、平成30年度以降は食用米の栽培面積が増加した影響で大幅に減少に転じた。県全体での飼

料作付面積は4,370 ha で、うち水田利用における飼料用稲栽培は324 ha、飼料用米は517 ha（令和2年度）となっており、コントラクター（飼料生産受託組織）が収穫・調整するという外部委託化が進められている。また、飼料用トウモロコシの作付面積は489 ha（令和2年度）であり、全体としては減少傾向である。

【乳用牛の飼養戸数・頭数の推移】



資料：農林水産省統計部「畜産統計調査」

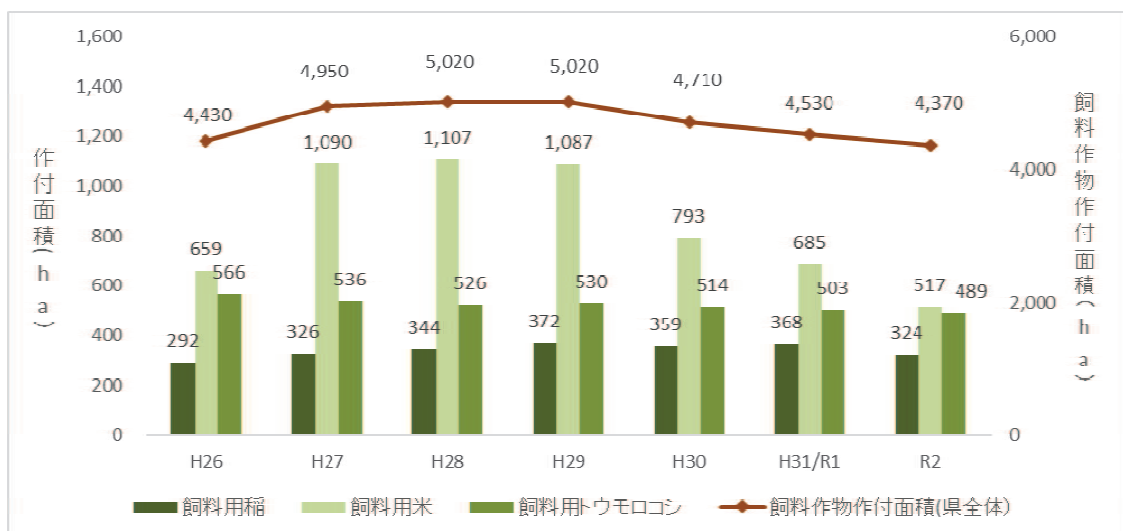
【酪農経営の推移】

	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	R2
乳用牛産出額（億円）	66	69	72	71	78	79	—
うち生乳（億円）	57	58	64	63	65	68	—
生乳生産量（t）	57,022	56,606	56,451	56,105	57,121	59,245	61,130
生乳生産者価格（円/kg）	100.7	103.0	103.8	104.1	104.2	108.1	114.6

※令和2年の算出額は未公表であるため「—」としている。

資料：農林水産省統計部「牛乳製品統計」、畜産課調べ

【飼料作物作付面積の推移】

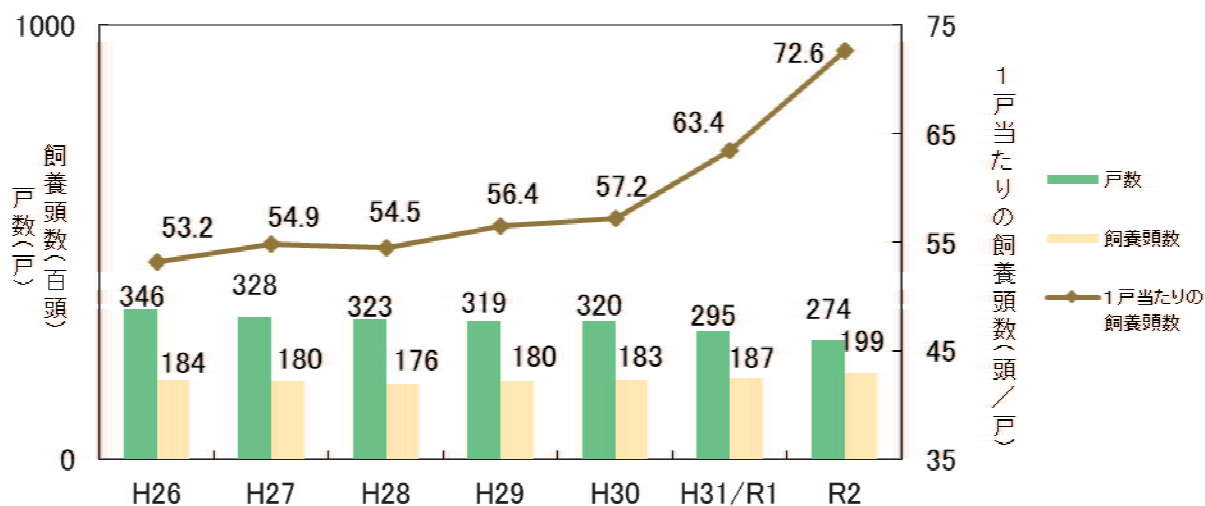


資料：農林水産省統計部「作物統計調査」、令和3年度鳥取県自給飼料増産計画

## 肉用牛

- ・総飼養頭数は昭和50年以降横ばい状況であったが、平成3年の牛肉輸入自由化後は徐々に減少している。しかし、平成29年以降は和子牛価格、枝肉価格の上昇を受け、徐々に増加している状況である。
- ・和子牛の年間出荷頭数は2,618頭と増加傾向で、うち県外へは1,711頭（65.4%）が出荷され、主な出荷先は兵庫県、熊本県、岐阜県等である。また、子牛価格は全国的な出荷頭数不足から、795千円と高値になっている。
- ・県内の成牛のと畜頭数は5,627頭で他は主として兵庫県、東京都でと畜されている。
- ・「白鵬85の3」「百合白清2」といった全国トップレベルの優秀な県有種雄牛の誕生により、和牛生産拡大の機運が高まる中、鳥取和牛のトップブランド化に向けた取組の充実を図っている。

【肉用牛の飼養戸数・頭数の推移】



資料：農林水産省統計部「畜産統計調査」

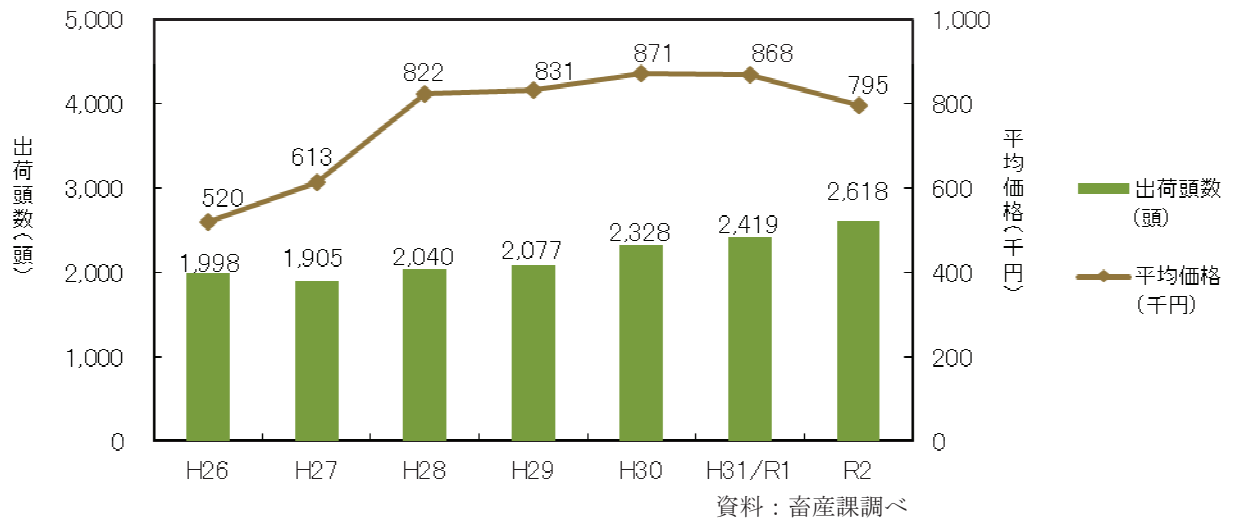
【肉用牛経営の推移】

	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	R2	
肉用牛粗生産額 (百万円)	2,600	3,400	4,400	4,800	5,100	5,400	—	
和子牛出荷頭数 (頭)	1,998	1,905	2,040	2,077	2,328	2,419	2,618	
成牛と畜頭数 (頭)	7,491	6,550	6,339	6,115	5,969	5,704	5,627	
和子牛価格 (千円)	520	613	822	831	871	868	795	
牛枝肉単価 (円/kg) 大阪	和牛(去勢)	2,002	2,422	2,711	2,583	2,606	2,534	2,230
	乳牛(去勢)	853	1,107	1,049	970	1,026	1,056	939

※令和2年の粗生産額は未公表であるため「—」としている。

資料：農林水産省統計部「畜産物流通統計」、大阪市「中央卸売市場南港市場年報」、畜産課調べ

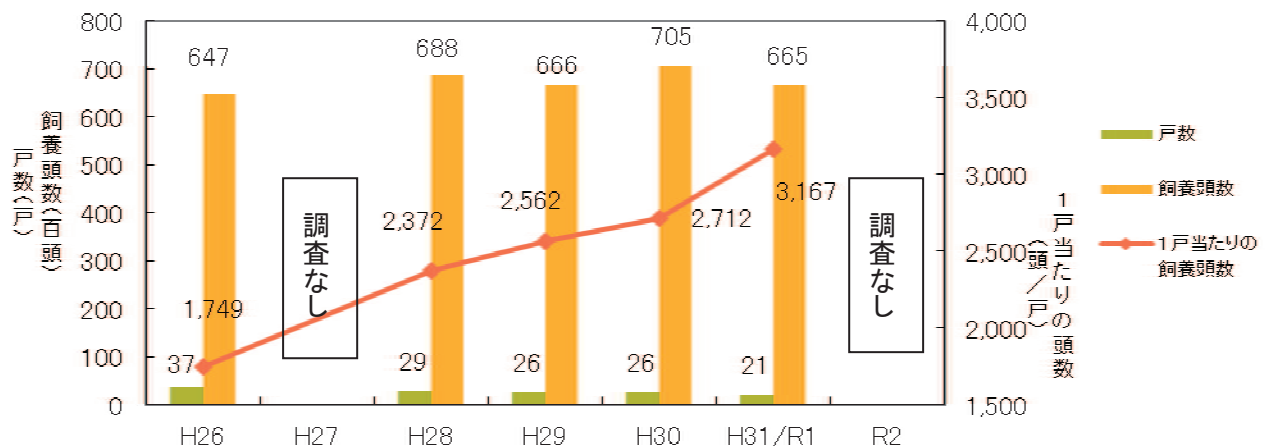
【和子牛出荷頭数と子牛価格の推移】



## 養 豚

- ・昭和30年代は小規模農家が大半であったが、昭和40～50年代には大規模専業経営へと発展してきた。しかし、環境問題の顕在、更に豚肉の輸入量の増加、価格の低下等が重なり、昭和60年代以降は飼養農家が大幅に減少した。なお、この間も飼養頭数は規模拡大により増加を続けていたが、平成2年以降は減少に転じ、近年は平成31年が665百頭と横ばい傾向となっている。
- ・1戸当たりの飼養頭数は農家戸数の減少に伴い徐々に増加し、近年は横ばい傾向にあったが平成28年以降増加に転じている。

【養豚の飼養戸数・頭数の推移】



注：H27、R2は『農林業センサス』実施年のため調査なし。

資料：農林水産省統計部「畜産統計調査」

【養豚経営の推移】

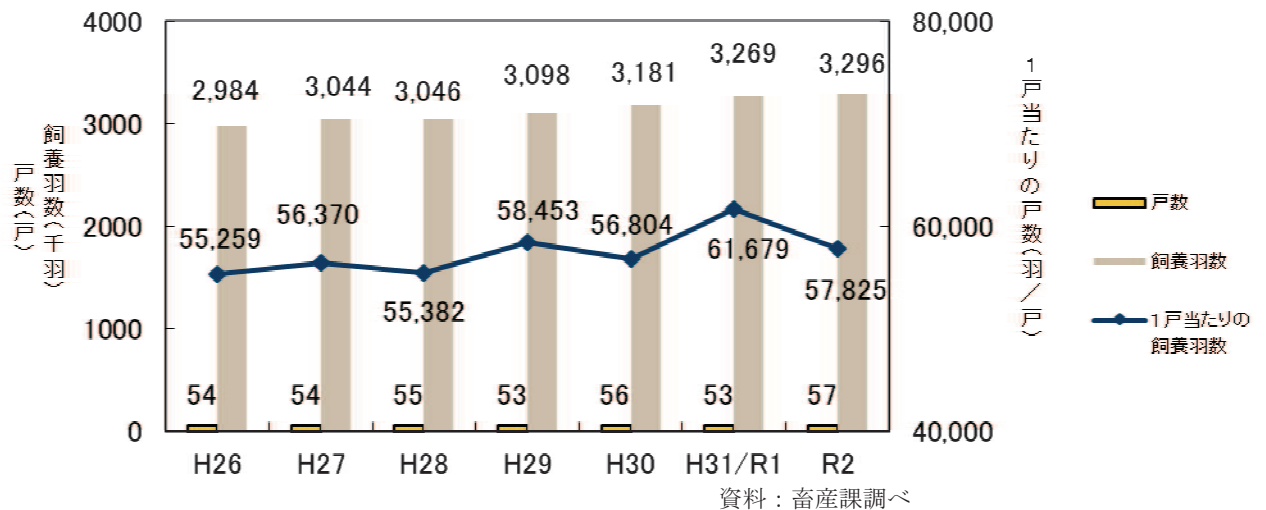
	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1
養豚産出額（百万円）	5,400	5,400	5,200	5,400	4,700	4,500
豚と畜頭数（頭）	82,046	80,608	80,122	81,185	81,676	80,867
枝肉単価（円/kg）	512	500	459	499	427	439

資料：農林水産省統計部「生産農業所得統計」、「畜産物流通統計」、枝肉単価は大阪市卸売市場平均

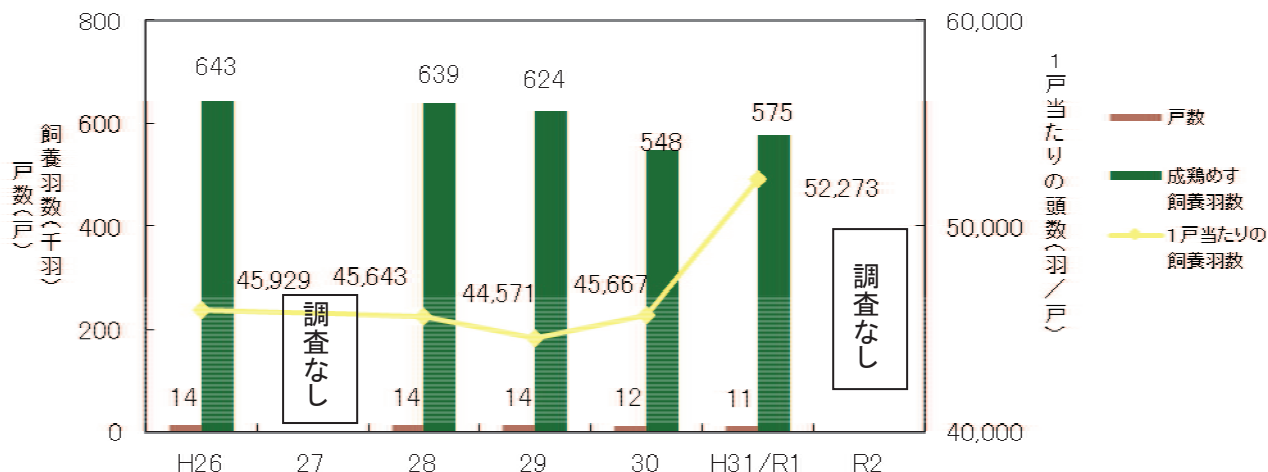
養 鶏

- ・大消費地に比較的近いという立地条件にも恵まれ、特にブロイラーは全国屈指の生産県として発展しており、近年の飼養羽数は横ばい傾向から徐々に増羽の動きが見られる。
- ・平成3年度に、県中小家畜試験場で鳥取地どりピヨが作出され、令和2年度は約12,238羽が県内外に出荷されている。
- ・採卵鶏は、昭和30年代頃、県下のいたるところで飼養されていたが、次第に専門化が進み昭和40年代には規模拡大・団地造成等本県の採卵鶏経営の最盛期となった。その後、オイルショックによる飼料価格の高騰と卵価の乱高下により、飼養農家が大幅に減少したものの、平成13年以降の飼養羽数は多少の変動はあるもののほぼ横ばいとなっている。
- ・近年の県内養鶏は、商系又は農協系の団体企業による大規模経営が中心となっている。

【ブロイラーの飼養戸数・羽数の推移】



【採卵鶏の飼養戸数・羽数の推移】



注：H27・R2は『農林業センサス』実施年のため、調査なし。

資料：農林水産省統計部統計部「畜産統計調査」

【養鶏経営の推移】

	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	
養鶏産出額(百万円)	10,000	10,700	10,200	10,200	10,100	10,600	
生産量	鶏卵(t)	10,597	10,624	10,895	9,856	9,569	11,647
	ブロイラー(千羽)	15,810	-	-	-	-	-
鶏卵価格(円/kg)	214	226	210	206	189	170	
ブロイラーもも肉価格(円/kg)	626	639	621	626	595	585	

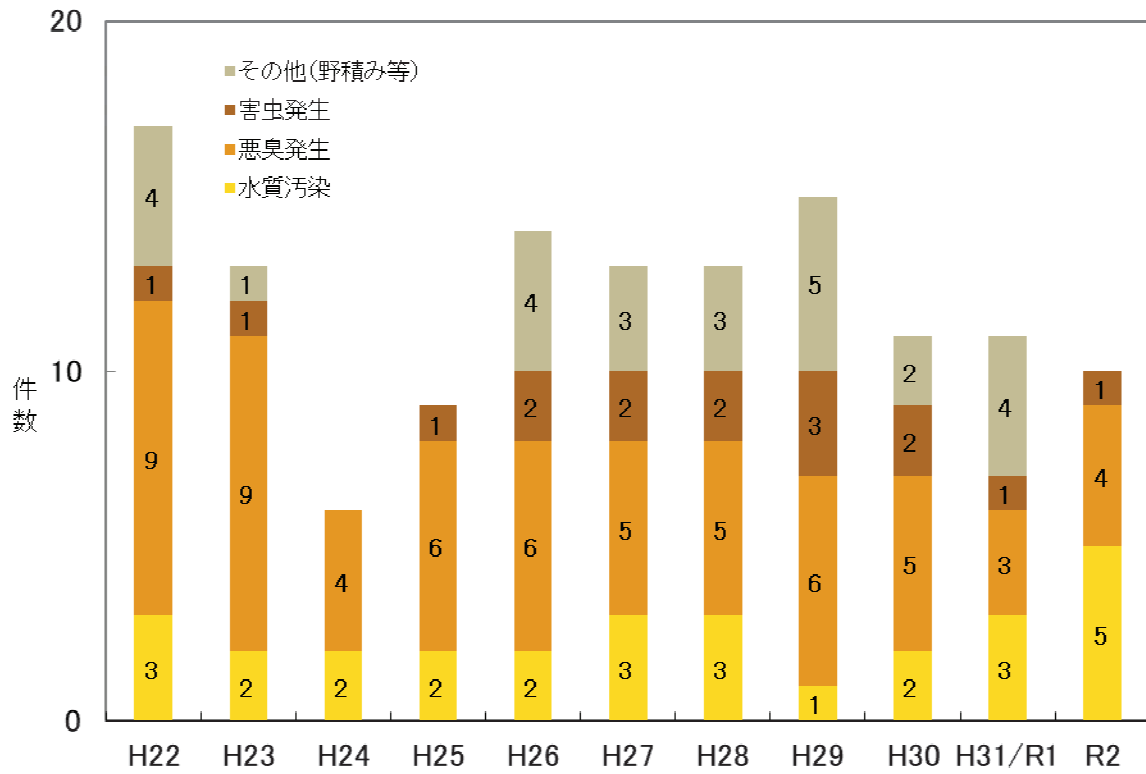
注：H27からのブロイラー生産量は農林水産省統計部の統計調査方法の見直しがあり、各県ごとの生産量を算出していないため、「-」とした。

資料：農林水産省統計部統「生産農業所得統計」、鶏卵価格はJA全農たまご大阪M基準、ブロイラーもも肉価格は日本経済新聞東京加重値の平均

畜産環境問題

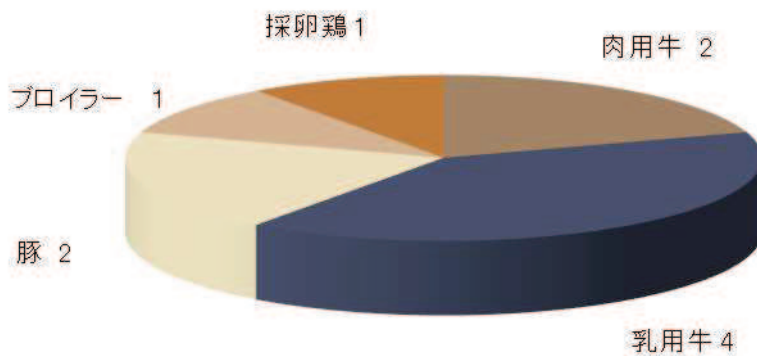
- ・畜産経営に起因する環境問題は、急速な規模拡大に伴う糞尿処理施設の不足等により年々増加していたが、平成11年の「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」の施行に伴い、施設整備や適正な処理が進み、減少しているところである。
- ・平成23年4月より水質汚濁防止法一部改正により、ある一定規模以上の農家については年1回以上の污水検査の実施と記録の保存が義務化され、環境負荷軽減が求められている。
- ・悪臭発生に関する苦情が継続して発生しており、令和2年は水質汚染の苦情が増えている。

【畜産環境種類別苦情発生状況の推移】



資料：畜産課調べ（苦情件数は実数値。複数の項目に該当する場合はそれぞれでカウント。なお、各年のデータは前年の7月1日から当該年の6月30日までの1年間の発生状況を集計したもの。）

【令和2年畜種別苦情発生状況】



資料：畜産課調べ